

私は個人の YouTube チャンネルを自宅で収録しようと思い、自分の書齋に iPhone をセッティングして、カメラ越しに部屋を見たらめっちゃ汚いんですね。実際よりも汚く見える。

これはちょっと片付けた方がいいと思って、ちょっとと思ったのですが、ちょっとではどうにもならない。気がついたら大掃除に発展していて、結局収録できませんでした。

でも、いい事が 1 つありました。物を片付けたり整理したりしていると、思わぬ探し物なんかが見つかったりするんですね。「エアコンのコントローラー、こんなどこにあったんか」みたいな事から始まって、オシャレな封書が出て来たので何かかなと思って見たら、ある方からの手紙でした。

それが、封を切っていないんですよ。「えっ！」と思って封を切ると、5 千円のアマゾンギフト券が出て来たんですね。めちゃ助かります。私は Kindle でどんどん買うので助かるのですが、手紙には「高原さん、55 歳のお誕生日おめでとう」と書いてあるんですね。何年前のやと。

でも、アマゾンギフト券以上に、大きな励ましとなる内容が書いてあったんです。

私の心を鼓舞するようなこんなステキな手紙、5 年前に届いていたのに、封を開けていなかったの、私はその益を何も受ける事ができなかったのです。たとえ貰っていたとしても、封を切らないで中身に触れないなら、そこからの恵みを受け取る事ができません。

実は日本に於いて、聖書は累計すると 5 億冊くらい出回っているそうですよ。

もしかしたら皆さんのお宅に、聖書が 1 冊と言わず 2 冊も 3 冊もあるんじゃないですか？

しかし、多くの人にとって聖書は封じられた書物となっているのです。

特に聖書の中で最も有名でありながら、最も多くの人に読み切られる事がない書簡があるんですね。

**黙示録**です。

黙示録ってものすごく有名じゃないですか。1 度読みたいなあと思った事があるはずですよ。

しかしながら、最後まで読み切った方は少ない。なぜか？

第 1 に難しい。解説がないと、何が書いてあるのかよく分からない。

まるで隠語・暗号の本に見えて来るんですね。でも解説が付いたら、こんなに分かり易い本はないです。

第 2 に黙示録ってなんとなく怖いイメージがある。

「神は愛です」とか、人々に慰めや勇気を与えるというよりも、この世の中で恐るべき事が始まる終末預言、人類の半分がたった 3 年半でいなくなるみたいな。そんな恐ろしい恐ろしい事が書いてある。だから近づきたくない。分かりたくない。みたいな事もあるんでしょう。

しかし、同時に思うんですね。なぜ愛である神様が、こんな恐ろしい時代が来るのを止めないんだろう？神様は何でもする事ができて、そして人間を愛しておられるのなら、なぜ神はこの世界に地震・飢饉・パンデミック・戦争、そういう事が次から次へと起こって、地上に逃げ場がどこにもない時代が到来する事をお許しになるのか？

黙示録を見ると、7 年間の患難時代は恐るべき時代ですが、同時に、人類史上最もたくさんの人が悔い改めてイエス・キリストを信じ、永遠のいのちを頂く期間でもあるんです。

但し、この期間にイエス・キリストを信じるというのは生やさしい事ではありません。  
殉教覚悟でないと、この永遠のいのちを頂く信仰に至る事はない。  
イエス・キリストを信じるのと引き換えに、信仰のゆえに殺される・人生を棒に振るという事を余儀なくされるような時代なのです。

この期間、一体どんな事が起こっているのか復習したいと思います。  
なにせ前回から1か月以上経っておりまして、話をしたはずの私も覚えていないという。  
当然、皆様も忘れていらっしゃる方が多いんじゃないかなと思いますので。

人類歴史というのは、輪廻思想でグルグル同じところを繰り返すんじゃないんです。  
「はじめに神が天と地を創造した」で最初からスタートする聖書の歴史観は、終末ゴールに向かって動いているんですね。終末、人類は未曾有の期間に入ります。

7年間の患難時代は人類史上最も苦しみ時代。7年間の前半3年半だけで、世界人口が半分になります。  
患難時代のスタートは、反キリストと呼ばれる独裁者がイスラエルと有効期限7年の契約を結ぶ事です。  
7年契約でスタートし、7年間続いて、最後はキリストが地上にまた来られる（地上再臨）で終わる。  
反キリストがイスラエルと契約を結ぶ事で始まり、キリストの地上再臨で終わる。  
この期間がユダヤ暦で7年間。

私たちがクリスチャンなら患難時代に入る事はありません。というのは、患難時代の前に携挙があって、  
イエス・キリストを信じている人はみな天に引き上げられるので、患難時代には入りません。  
にも拘らず、黙示録は患難時代に入らない教会宛てに、「7つの教会に向けて書きなさい」と書いている  
のです。

実は、この世界を不幸のどん底に落とし込んでいる最大の理由は悪魔という霊的存在です。  
この悪魔の最後について明言、悪魔は最終的に完全敗北して終わるという事をハッキリと書いてあるの  
がヨハネの黙示録。すなわち、クリスチャンにとっては勝利を保証する書物でもあるのです。

7年間の患難時代は黙示録6章から19章に時系列で書いてあって、患難時代は“前半の前半・後半”と  
“後半”の3段階で解き明かされています。

前半の前半を7つの封印の時代（7段階の封印）で表しています。  
前半の後半は7つのラッパの時代。  
後半は7つの鉢の時代。

封印・ラッパ・鉢の時系列で書いてあるのですが、4回だけ挿入が入ります。  
時間の順番に書いてあるけど、4回だけこの話を中断して、今までの事をより理解するために、或いはこれ  
から起こる事をより深く理解するための説明が挿入という形で入っている。  
今日見る箇所は1回目の挿入です。  
この説明を聞いているか否かによって、理解が全く変わって来るんですね。

前回は、患難時代に世界中に出て行って、御国の福音を伝えてくれる14万4千人のユダヤ人についてお  
話しました。この内の何人かは日本にも来てくれます。そして、日本語で福音を語ってくれるでしょう。  
その結果、誰にも数える事ができないほどの大勢の人々がイエス・キリストを信じて救われます。

この大勢の人々の事について、今日はお話したいと思います。今日のメッセージのポイントは3つ。最初の挿入箇所であることを踏まえて、

1. 患難時代の天に行った殉教者たちの特徴について（白い衣をまとっている人たち）
2. 彼らが天にいる間、御使いたちが神に向かって礼拝を献げている。御使いの礼拝について。
3. 殉教者たちに天で与えられる7つの特権。7つの特権をやっていくと、とても1時間では済まない。もう既に15分終わってしまった。焦ってるんです、今。なんとか1時間で収めたいと考えていますが。

#### 1. 患難時代の天に行った殉教者たちの特徴について（白い衣をまとっている人たち）

黙示録 7:9

その後（のち）、私は見た。すると見よ。すべての国民（くににたみ）、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

全ての国。大体200くらいの国がありますよね。国連加盟196くらいですか。

加盟していない国も合わせると200以上あるそうですが、すべての国民、部族、民族、言語から。少し横道に逸れますが、聖書は人類をこの4つのカテゴリーで分類します。

人種という言葉は出て来ないでしょ。“すべての人種”って書いてない。

人種概念は進化論から来たんです。人種って…。人間はヒト科/ホモ・サピエンス1種類しかない。

にも拘らず、黒人・黄色人種・白人。色が白くなるにつれて進化している、という前提に基づいて人種という考え方が出て来たんです。

聖書では、人間は全て同じ共通の先祖から出て来たので、人種というカテゴリーは登場しません。進化論に基づく考え方です。

全ての国々の中から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち。

御座は天の神の大座の事です。これは既にやりました。御座の中央に子羊イエス・キリストが立っている。

御座の前と子羊の前。天にある御座の前に立っているという事は、大勢の群衆は天にいる人々です。

地上の何かの共同体の説明ではなく、天にいる大集団の説明なんですね。

天にいる人々の特徴は白い衣を身にまとい。白い衣を身にまとっている。

世界中から来て天にいる白い衣の人々とは、具体的には誰の事なんですか？

黙示録 7:13

すると、長老の一人が私に話しかけて、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか。どこから来たのですか」と言った。

長老の一人とは、黙示録4章・5章でもうやったんですが、24人の長老たちの一人です。

24人の長老たちとは患難時代の前に引き上げられた教会の事である、と既に解説しております。

24人の長老たちの1人がこの大群衆を指差して、「この人たちは誰ですか？」と聞いているんです。

なのではっきり言える事は、24人の長老とは違うカテゴリーのグループだという事です。

「この大群衆の人たちは誰ですか？」自分の事やったら「自分」て言うやん。

これは教会を代表しているこの1人が、分からないのでヨハネに聞いているんじゃないんですね。

これは分かっているんです。

良い教師は教えたい事を一方的にべらべら喋るんじゃないんです。私みたいに。

良い教師とは生徒に考えさせる教師ですよ。答えを最初から説明すると、その時分かったような気になるけど頭に残りません。一度考えて悩んで、何だろう何だろうと考えて「分からないです。」「答えはこうです。」ズバツと入って来るんですよ。クイズ形式。

『ざっくり黙示録』では、それはしません。皆さん来なくなる。

「じゃあ、あなた」とか当てられたりしたら、ちょっとやばいじゃないですか。

「どうですか、皆さん？」みんな目が泳ぐ。「当ててくれるなよ」みたいな感じで。だからしませんが。

ここでは、知っているけどヨハネに考えさせるために、「この白い衣を身にまとった人たちはだれですか」聞くんですね。しかし、ヨハネは分かりませんでした。

#### 黙示録 7:14

そこで私が「私の主よ、あなたこそご存知です」と言うと、長老は私に言った。

「この人たちは大きな患難を経て来た者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」

私の主はキリストの事ではなく、英語の“Sir/サー”みたいなもの。“Yes Sir.” “ご主人”みたいな。この人たちは大きな患難を経て来た者たちで。大きな患難の前に、ギリシア語では“ホー”という冠詞が付いているんです。一般的な苦しみ・試練ではなく“あの”苦しみ。

大きな激しい、例の、あの苦しみ。あの患難から出て来た。

聖書が最初からずっと警告している人類史上最大の苦しみの期間とは患難時代です。

あの患難時代を経て来た者とは、経験して出て来たという意味です。

経験して、その中から出て来て天国にいる人たち。

すなわち、患難時代に迫害され、命を取られて死んだ殉教者たちの霊。

「信仰を捨てなさい」という圧力に応じないで、その信仰に殉じてキリストを信じるのをやめなかった。

その代わりに命を取られた人たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。

だから、この人たちは殉教者で、天国にいるという事が分かるんです。

#### 黙示録 7:9

すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が、どうして信じる事が出来たのか？すべての国民、部族、民族、言語に、14万4千人のユダヤ人たちが訪問し伝道してくれたおかげですよ。やがて全ての国民は、ユダヤ人から御国の福音を聞きます。

つまり、ユダヤ民族は全ての異邦人にとって命の恩人になるのです。

なので、反ユダヤ主義という考え方がどんなに非聖書的か分かると思います。

未だに“ユダヤの陰謀”という事で色々言う人いますが、今度ユダヤ陰謀の滑稽さについて、またやりますので是非お越しく下さい。

だれも数えきれないほどの大勢の群衆が天国にいるという事は、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が患難時代に殺されるという事です。1人を見せしめにとり、少数を血祭りに上げて、ではないんです。キリストを信じたら例外なしにターゲットにされる時代が来るんですね。

この人たちは神の前に立つ事を意識した時、心の底から罪の赦しが欲しいと思ったのでしょうか。

今ね、聖書の福音を語っても、中々「そんな、弱い者の松葉杖だ。」「私、人生困ってないし」みたいな。だけど患難時代は、信じていてもいなくても、次から次へと患難が降りかかってくるんです。その患難が前もって黙示録に全部書いてある。書いてある通りの事が、その順番で次々に実現して行く。この時代の中で、心ある人たちは「本物の預言だ。ヨハネの黙示録は、本物の神の本物の言葉だ」という事が分かるでしょう。

そして、自分たちが神の前に立つ時が来る事を知りましょうが、その時に皆慌てふためくんですね。

昔、精神科ドクターが書いた本で、名前も忘れてしまったんですが、うろ覚えでこんな話がありました。お母さんが娘さん連れて精神科クリニックに診察に来ました。

娘は目が見えない。だったら眼科でしょ。なぜ精神科に来たのか？

正確に言うと、目が見えないんじゃなくて、まぶたが上がらなくなって、結果として見えないと。

なぜまぶたが上がらなくなったのか？どんな事があったのか？

娘さんはアパートで一人住まいしていたんですが、同じアパートのあんまり親しくないAさんがひょっこり来て「ちょっとお金貸してくれませんか？来月の〇日に返すから。今困ってるんです。助けてください。」お金貸したけど、翌月の約束の日になっても何も言って来ないんですね。

1日目何も言って来ない。2日目も。3日経っても何も言って来ないので、自分の方から「約束の期日3日も過ぎてるけど、どうなったの？」と聞いたら一部返してくれた。「残金は来月のこの日に返すから、もうちょっと待ってください。」

翌月のその日になっても、やっぱり音沙汰ない。自分もそんなに裕福ではない。

きっちりしている娘さん。いつになったら言って来るんだろう。「今日だろうか？」「今日だろうか？」待ち続けるけど、一向に返しに来る気配がない。

数日後スーパーで買い物していたら、問題のAさんが前からやって来る。

それを見た瞬間「ああ！この人の顔なんか見たくない！」と思って、まぶたを閉じて以来上がらない。

皆さん、そういうの、どないやって治す？無理やりこじ開けてとか、そんなんじゃない。

どうやって治したか、なんぼ考えても思い出せないんです。閉じたまんまというところだけ覚えてる。

だけど、それを読んで、人間の心と体って本当に結びついているなと思うんですよ。

心の病気は体に映されるし、体の病気が中々治らなかつたら心まで病んでしまうし。

特に怒りのエネルギー・恨みのエネルギー・憎しみのエネルギー、この憎悪のエネルギー。

この人憎い！赦す事できない！けしからん！この負のエネルギーって、もう凄まじくて。

借りている方は健康なのに、貸している方が肉体を蝕まれているんですね。

憎しみのエネルギーはそれほどまでに凄まじいけど、このエネルギーが自分に向く事を“罪責感”と言うそうです。他の人がけしからん事をした時「なんだ、これは。不正じゃないか！けしからん！」

それもまた苦しい事だけど、「一番けしからん事は私自身だ」という事に気がついて、「なんであんな事言ってしまったんだろう。」「なんであんな事やらかしてしまったんだろう。」

自分に対する憎悪の気持ちやエネルギーが自分に向けられる時、その気持ちが罪責感。

この恨みの気持ち、一番手っ取り早いのは、復讐する事によって癒されると言うんです。

他の人なら、その人に復讐する事でその時はスツとするんでしょうけど、自分が自分の良心に照らした時赦せない状態になったら、自分が自分に復讐するんですか？それなら、結末は自殺じゃないですか。

罪責感全くない、どんなに酷い事を言われても罪責感が全くない。これはもうサイコパスですよ。世の中怖くて歩けない。だけど罪責感があると、人生を肯定的に生きる事ができない。

罪責感を癒すのは復讐を遂げる以外ないのですが、本来私が受けるべき罪の呪いの復讐を、私に代わって受けてくださった方がいるんです。それがイエス・キリストです。

イエス・キリストの十字架は、私の罪のために、その復讐をたった1人で受けてくださった場所ですよ。気が済むまで徹底的な復讐。

もうこれ以上ない酷い復讐を、イエス・キリストは十字架の上で受けてくださったんです。

#### 黙示録 7:14

長老は私に言った。「この人たちは大きな患難を経て来た者たちで、その衣を洗い、子羊の血で白くした。」

子羊の血、つまりイエス・キリストのいのちは、どんな罪も消し去る完璧な石鹸。

皆さん、消してしまいたいと思う事ありませんか？

私、人の前で話すから、そんだけ失言が多いわけ。言った言葉、後から消せたらどんだけええやろと。あります。また、言われた事で消して欲しいのもあります。

言葉って、言うまではその人が言葉の主人ですが、言った後は言葉がその人の主人ですよ。

人間って、言った言葉に支配されるでしょ。

「あー、しんど」と言ったら“しんどい”という言葉に支配されて、元気良く振る舞えない事ありませんか？

「あー、しんど。元気もりもり！」って、そんな奴はおらん。

言葉って、出してしまったら、言葉がその人の主人になるんです。

ところで、キリストの血によって罪赦される事が白い衣を着る（義とされる）という事ですが、聖書には多くの箇所「白い衣を着せてくださった」「神/父の手によって白い衣を着せられた」「白い衣を着せられた」という表現があります。その衣を洗い、「自分で洗った」というのはここだけなんですよ。

ここでは、神が白い衣を用意してそれを着せてくださったというんじゃなくて、着る彼ら本人がその衣を子羊の血で白くしたと。

なぜ“着せられた”ではなくて“洗った”と書いたのか？その時代、罪を消し去る石鹸は神によって無条件で、タダで与えられているのですが、それを受け取るのは覚悟なしに出来ない事でしょう。

「私はキリストの救いを受け入れます」と能動的に態度で示す事を、ここで示唆しているのではないかと思います。

もう1つ。黙示録 7:9 すべての国民、部族、民族、言語から、だれも数えきれないほどの大勢の群衆が御座の前と子羊の前に立ち、白い衣を身にまとい、手になつめ椰子の枝を持っていた。

白い衣を身にまとい。患難時代に殉教した人の体は、どこかに埋葬されるか、ほったらかしにされるか、いずれにしても患難時代の地上にあるんです。そして、この人たちが復活して体を持って天国に入る。復活した体を持つのは患難時代が終わってから。これは黙示録 20 章にあります。

ところがこれを見ると、殉教者たちは白い衣を身にまとい、と書いてある。

彼らの体は地上に残っているはず。霊と魂は天国に行くけど、体はどこか地面に埋められるか、どこかに晒されているか、とにかく地上に残っている。

ただここでは、**白い衣を身にまとっている**。体を持っているんですね。

20章を見ると、患難時代が終わった後で千年王国の前に、彼らは復活して新しい体を得ると書いてある。どうということ？これは字義通りに読むしかないですよ。書いてある通りに読むという事です。書いてある通りに読むなら、患難時代に天国に行った人たちは、患難時代の終わりに復活の体を受ける前に、特別な体を持っていると考えざるを得ません。それはどんなものか分かりません。でも書いてあるから。字義通りに受け止めるしかないです。

黙示録 7:10 **彼らは大声で叫んだ。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」**

彼ら（天に行った殉教者たち）は**大声で叫んだ**。叫んだという事は意識があるわけですよ。時々「天国に行った人には意識がない」と教える人がいるんですよ。つまり眠った状態。「天国に行った人たちは意識がなく、麻酔がかかったような状態になっている」と言う人たちがいます。でも、聖書で“眠る”と言う時は、肉体にのみ言われる事で、霊と魂は眠りません。現にここでは、天にいる**彼らは大声で叫んだ**。彼らは死んだ後、天国でちゃんと意識を持って神を礼拝しています。

なので、そういう解釈をしている集団があれば、聖書解釈が明らかにちょっと違うので警戒して欲しいと思います。というのは、聖書解釈が明らかに違う場合、違いが1個所だけではないというケースが多いからです。特にカルト宗教とかは「無意識だ」と教えている所がすごくたくさんあります。特に韓国系のカルト宗教がそうですね。是非気をつけていただきたいと思います。

彼らは「**救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。**」と叫んだんですね。この言葉に少し注目したいと思います。「私たちは救いをもらったので、救いは私たちにある。」と言ったんじゃない。「**救いは、御座に着いておられる私たちの父なる神と、子羊イエス・キリストにある。**」

これそっくりの言葉を語った人物がいるので紹介したいと思います。今NHKの大河ドラマで『麒麟がくる』というのをやっているんです。吉本の芸人じゃないですよ。僕は見てない。クリスチャンと関係ないのは見ません。というか、あまり見たいと思わへん。けど、見てる人は「スッゴイ良かった！」って。連続もんは途中から見る気しません。

主人公は明智光秀（1528-1582）。信長を本能寺で倒した謀反人明智光秀。なんで主人公や？明智光秀そのものにはあまり関心ないんですが、彼の3女に『玉/たま』という美しい娘さんがいます。彼女は後にキリシタンになり、『細川ガラシャ』と呼ばれました。非常に賢い聡明な娘だったそうですが、16歳になった時に結婚を世話されます。誰が言ったか？信長。「いいえ」言えますか？相手信長や。

信長には、秀吉は別格として、参謀・明智光秀と非常に優能な武将の細川藤孝がいました。光秀の3女玉（1563-1600）と藤孝の長男忠興（ただおき/1563-1646）。忠興はものすごく気性が激しいけどイケメン。この2人が結婚します（1578）。玉は16歳。似合いのカップルで幸せな時だったんですが、4年後に光秀が信長を討ったんです。その時、光秀は藤孝と忠興に向かって「俺の味方になってくれ」と言うのですが「断わる！」忠興は秀吉軍に参加して光秀を追いかけ回します。最終的に、光秀は百姓が突いた槍で死にました。(1582)

その瞬間から玉は天下の謀反人の娘になる。という事は、細川忠興は天下の謀反人の娘の夫になる。これは出世が見込めない。どうすれば信長に忠誠を誓って来た事が立証できるかという、玉に対して出来るだけ厳しく辛く当たる事によってなんです。

「謀反人の娘なら、たとえ妻であっても容赦せんぞ」というのを皆に見せつけなければ彼の将来はない。それで丹後（\*京都府）の味土野（みどの）という所に追放して2年間幽閉。閉じ込めてしまいました。この間、彼女はもう苦しむんです。

やがて秀吉が取りもって、夫婦として復縁するのですが、だからといって「ハイハイ」と受け入れたら自分の出世の道はないと思った。それで、細川家の屋敷に玉を閉じ込めて、彼自身は秀吉の命令で九州征伐に行きます。

細川家の屋敷は玉造（たまつくり/\*大阪市）にあったんですよ。今でも“細川屋敷跡”があります。JR森ノ宮で降りた方が近いと思うんですが、その時の大阪城って、今の大阪城の4倍。広大だった。

その時玉は「私は夫に仕えてきたし、一生懸命真面目に生きてきたけど、他の人の選択によって人生が振り回されて。本当に信じられるものはこの世界にないのだろうか？人生って一体何なのか？」もう訳が分からない。

魂の飢え渴きが猛然と湧き起こっていた時に、高山右近を通してキリシタンの話を聞いたんです。

そして、夫が九州征伐に行っている間に、身分を隠してこっそり大阪の教会に行きました。

行ったその日、復活祭のメッセージがあった。

「キリストは私たちの罪のために十字架で死んだけれど、3日目によみがえった」という復活のメッセージを聞いて、その場で「洗礼を授けてください！」「ところで、あなた誰ですか？」「それは言えません。」「身元を明かさないうちに洗礼を授ける事はできません」と断られたけど、彼女は聖書やキリシタンの教を学ぶための本を色々な手段で手に入れて学び、最終的には彼女も、彼女の侍女も、子供たちの乳母も、子供たちも洗礼を受けました。「子供はなんとかハライツ（天国）に行って欲しい。」

帰って来た忠興は「俺が命懸けで九州で戦っている間に、お前キリシタンになったんか！ええかげんにせえよ！」「玉のそばにいながら、なんで止めへんかったんや！」

乳母なんて、ちょっとした些細な失敗を咎められて、それは口実なんです、鼻と両耳を削がれて、頭部から大量の血を出しながら追い出されているんです。

忠興という人は切れたらホンマに怖い人です。どれだけ怖いかという話がいっぱい残っています。

詳しくは三浦綾子さんの『細川ガラシャ』読んでください。めちゃ怖い。この人。

自分の周りのクリスチャンが夫によって次々に成敗されてしまう。夫は既に側室を妊娠させている。

自分は遠ざけられて行っている。

その中で、玉はバテレン（宣教師）に手紙を書きます。殉教の覚悟をした手紙。それがルイス・フロイスの『二十六聖人殉教録』の中に収録されています。それを現代訳的で言うと、こういう事です。

1587年、豊臣秀吉がバテレン追放令を出しました。

「バテレン全員が追放されるのではなく、一部の方々は残ると聞いて、私は大変嬉しく慰められています。もし天主様が許してくださるなら、また個人面談を受ける事ができるでしょう。

私はその時を楽しみに待っています。

ところで、私について言うなら、私がキリシタンになったのは人に説得されてではありません。

全能の天主がその恵みによって、私が見出す事ができるように導いてくださったのです。

私は修行や悟りによってではなく、全能の主の恩寵によって、この救いを見出しました。  
ですから、天が地に落ち、草木が枯れたとしても、天主様から頂いたこの信仰は、枯れる事も揺らぐ事もなく、いつまでも永らえる事でしょう。」

それまで彼女は禅宗なんです。禅宗は修行でしょ。禅やから。悟り。  
「修行と悟りの世界じゃない。私の救いの由来は私の知能や探究心ではなく、出元は神です。  
救いは神から来た。信仰も神から来た。神が私に植え付けてくださったものなら、それは枯れる事はないでしょう」という信仰なんですね。  
恐らくこの意味です。「救いは、御座に着いておられる私たちの神と、子羊にある。」

「どうしても聖書の事が分からない」という方は、1度この神に願ってみてはいかがですか。  
「私の内側を捜しても、どこにも信仰が湧いて来ないし、私の内面を見ても、勇敢な気持ちは湧いて来ない。でも、こんな者をも変える事ができる救い主・神よ。あなたがおられるなら、どうぞ、その信仰を私に与えてください。」  
救いの出元の神に訴えてみたらいかがですか？心からお勧めしたいと思います。

2. 彼らが天にいる間、御使いたちが神に向かって礼拝を献げている。御使いの礼拝について。

黙示録 7:11-12

11. 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を礼拝して言った。

12. 「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、私たちの神に世々限りなくあるように。アーメン。」

御使いは“みつかい”。“おつかい”ではない。天使の事です。

この霊的な存在が「アーメン！」言いながら、神を礼拝しているんですね。

患難時代に殉教した人たちが天国に来た時、御使いたちは礼拝している。なぜ礼拝しているんでしょう？礼拝しているその気持ちが、ちょびっとだけ私にも分かるような気がするんですね。

私も聖書の福音を伝えさせていただいて、今はコロナであちこち出向く事はできないけど、ひと頃は飛び回っていました。その1番の喜びは、人が変わるのを見る事ができるということなんですね。

「全然キリスト関係ないわ！」とすさんだ生活をしてきた人がキリストを信じて、1年後に再会した時、別人 28号というか、すごく良くなっているのを見たら、思わず「こんな風に人を変える事ができるのは、主よ、あなただけです」と神を礼拝したくなるんです。

2年前にカリフォルニアに行った時、マネージャーみたいに付きっきりで身の周りの世話をしてくれた方がいました。日本人教会の牧師だと思います。まだ40歳くらいの若い方ですが、どんな無理言うても聞いてくれるねん。段々私も「ハリウッドのあそこ、見たいんやけど。」「いいよ！」

「世界最大のギターセンター見たい。」「行きましょう！」「ちょっと試し弾きしたい。」「言ってみましょう！」ジミー・ペイジのレスポールが置いてあるんですよ。

そして「ギャング街、歩いてみたい。」「んー、でも危ないです。」「赤信号でも行け」という常識がある。赤信号でじっとしてたら撃たれるから。車が凹んでいるけど、こすれたんじゃなくて銃口で凹んでいる。「どうしても行きたい！」「じゃ、車で行きましょう。」「どんなリクエストでも聞いてくれる。良い人です。」「あなた、なんでそんな良い人なんですか？」「僕、良い人じゃないです。」

どうしてクリスチャンになったのか？

「おじがクリスチャンで、日本人伝道のためにアメリカに行った宣教師だったんです。彼に息子が3人いて、僕より1つか2つ年上でちょっとだけお兄ちゃんだけど、この息子たちがめちゃくちゃ乱暴。オモチャ貸せ言われて、貸したら壊され。だからクリスチャンの子供は凶暴。クリスチャンの家に行ったらロクな目に遭わへん。僕はキリストが嫌いだったワケじゃなく、クリスチャンホームの子供があまりにも乱暴で、躰がなっていないので嫌いになりました。」それは本当にお気の毒。ところが、大人になってアメリカで再会した時、あの乱暴な3人息子が別人になっていたと。

彼はベーシストで、パークレイだったと思うけどベース部があって、そこに首尾よく入学して一生懸命学んで。それだけでなく、食って行かないといけないので、バンドを組んで色んな所で活動するけど、その仲間が皆薬物やっている。当たり前みたいに薬物やっている。そういう人たちとチームワークをはからないといけない。いつも一緒にいてる。その内、彼も手を出してしまった。あつと言う間に墮落して、どうしようもなくなって。その時の彼の運転免許証の写真を見せてもらったけど、完全に売人。生ける屍。ガイコツみたいな顔。平安がない。パリピがラリってる。こいつと絶対友達になりたくない。

薬物でトリップしてたらインスピレーション与えられる。そうじゃない。どんどんダメになって行った時、あるクラブに入ったら、今まで聞いた事ないようなベーシストの演奏を聞いた。すごい良い音色。「なんでこんな音が出るんだ？」演奏が終わって「どうやって、あんな音出す事ができるの？」と聞いたら、「俺は神のインストゥルメント(楽器)だ。」「ナニ言うとなねん、こいつは」と何の感動も受けずにその場を去りました。

そしてどんどん墮落して、もう自分では人生のコントロールができないと思った。その時英語の新約聖書を持っていて読んでいたんですが、**使徒の働き**で、サウロがイエスに反抗して弟子たちを大迫害、ムチャクチャやっている。そのサウロに神イエス・キリストが復活の姿を現して、彼は一時的に目が見えなくなるのですが、見えるようになるためにクリスチャンに祈ってもらう必要がありました。

神はあるクリスチャンに言います。「祈ってあげなさい。彼はわたしの名を王たち・異邦人たち・イスラエルの子たちに運ぶわたしの選びの器です。」  
「彼はわたしの選びの器です」は、英語では“He is My chosen instrument”と書いてあるそうです。「ここか！これか！」楽器は独りで良い音鳴らせない。  
「アイツはこの復活のキリストに弾いてもらってたんか！」

彼に音楽の話振ったら大変な事になるよ。私は純粹にキリストの証しの部分だけ聞きたいけど、音楽理論の話やったらタラララ～。所々ためになる話もありました。人間はなぜ言語を喋れるか？元々言語を話す能力があるから話せるんだ、という話を昔しましたね。言語能力を持ってないサルに、人間の言葉を10万時間話しても話せません。元々持ってないから。

それと同じように音楽、例えばメジャーというコードをジャラ～んと弾くと、何か楽しい陽気な感じがします。どの文化圏の人も。しかしマイナーにすると、どの文化圏の人が聞いても、なんか悲しい寂しい。メジャーセブンにすると、どの文化圏の人も幻想的…。ナニ言うてるか分からへん。完全に置き去りにしてるのがよく分かるんですけど。

「メジャー弾いたら楽しいと思わなければならない」と学習して、そう思うんじゃないんですって。人はなぜ音楽を楽しめるのか？音楽を楽しむ能力が既に存在しているので、音楽が耳に入って来た時反応できる。音楽を楽しめる能力を造ったのは神。もっと言うなら、音楽を作ったのは神。音楽を作った神から離れて、麻薬の力を借りて、良い作品ができるはずがない。更に言えば、楽器は吹き手から離れてしまったら音出えへん。なぜ私の人生から良い歌が出て来ない？私が自分の作者から離れているからじゃないか。

どん底の中で、彼はキリストにすぎるんです。そして、良い人になっていました。麻薬の売人みたいな顔をしていた人が、本当に爽やかな人になっているのを見た時、思わず「こんな変化を与える事ができたのは、神よ、あなた以外にありません」と賛美する他ないです。

地上で1人の罪人が悔い改めると、天では御使いが大喜びすると書いてあります。酷い酷い苦痛に満ちた、信じる事で大迫害を余儀なくされる患難時代に、弱い弱い人間がキリストを信じて天国に帰って来た姿を見た時、「神よ、あなたの力が偉大だからです」という礼拝が湧いて来たんですね。御使いは人間を通して神を礼拝しているんです。人間を見て神を賛美するんですね。

### 3. 殉教者たちに天で与えられる7つの特権。

黙示録 7:15-17

15. それゆえ、彼らは神の御座の前にあって、昼も夜もその神殿で神に仕えている。御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。

①神の御座の前にあって、神の真ん前に、神のすぐ近くに立つ事ができる。

映画では最前列は見にくい。でもボクシングはリングサイド席、相撲は土俵の近くが1番良い席じゃないですか。コンサートでも後ろの方は安い席。すぐ近くに、すぐそばにいるという特権。

②昼も夜もその神殿で神に仕えている。

地上の神殿は天国の写しと影です。神殿は天国の本体をコピーした物なので、本当の本物の神殿の構造は元々天国なんです。そこで彼らは、ただ礼拝しているんじゃなくて神に仕えている。つまり、一人一人に与えられている本領を発揮するような仕事と使命が天国にもあります。

「天国でも仕事か…」それは、この地上でロクな仕事をしていないからだと思うんですよ。私はどっちかというところ仕事好き。疲れるけど。10年間営業やって、しんどいけどやっぱり楽しかった。特にクロージングとって、最後契約書にサインしてもらう時は「ヨッシャ！」分かるでしょ？地上で自分に与えられている能力を発揮させていただけるのは、生きている実感がありますね。

人生って、できる事に集中する事やと思うんですよ。

できない事を悔やむために、人生あるんじゃないんですよね。

できない事は人にやらしといたらいいんです。自分にできる事を掘って掘って掘って行く。

これは本当に快樂です。

③御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られる。幕屋はテントの事です。

中東では、自分のテントに逃げ込んで来た人は、どんな指名手配者でも命を張って守ります。

つまり、完全な神の庇護の下にある。テントに入ったら、迎え入れた族長が最高の料理でもてなします。

天国は神から直接もてなしを受ける場所。いいですねえ。

④16. 彼らは、もはや飢えることも渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も、彼らを襲うことはない。

これは、患難時代に彼らがどんな目に遭ったかという事をあぶり出してますよね。

彼らは信仰を持ったために飢え渴いたんです。反キリストを拝まないゆえに、売る事も買う事もできず食べる物も飲む物もない。

太陽もどんな炎熱もとは、恐らくホームレス状態。或いは患難時代の最後に、同じように災害を受けた可能性もあります。患難時代の特徴は天変地異。その苦しみを彼らも受けたけど、天国では一切の苦しみから解放されている。苦しみが何一つない世界。それが天国です。

17. 御座の中央におられる子羊が彼らを牧し、いのちの水の泉に導かれる。

また、神は彼らの目から、涙をことごとくぬぐい取ってくださる。

⑤御座の中央におられる子羊が彼らを牧し

羊は羊飼いに牧されるのに、ここでは面白い事に子羊が牧するんですよ。子羊は普通羊飼いに牧される。この子羊は羊を経験した事がある牧会者です。

そして牧するという言葉は、いつでもどこでもどんな時でも共に歩んでくださる。

いつもキリストを間近に共に歩むという生活・人生が永遠の世界で待っているという事です。

人生は誰と一緒に歩むかによって、楽しくもなるし苦しくもなるんじゃないですか。

「この人と一緒にいるとリラックスできていいなあ」という人と、共に険しい道を歩むのは楽しいですよ。だけど、一緒におったら息詰るみたいなところで、レストランにおっても食欲進まない。

誰と一緒に過ごすか？キリストと一緒に過ごしてくださるんです。

⑥いのちの水の泉に導かれる。

格闘家やボクサーは階級制で、体重を合わせないと駄目。ウエイトオーバーしたら失格なので、彼らは水抜き・減量減量。昔沖縄出身のミドル級の浜田という選手、知りませんか？

僕、ボクシングすごく好きやったから。この人の趣味は日本百名水を飲み歩くこと。

減量で水を飲まない。水を絶って絶って、体重クリアした後に飲む水のなんと美味しいこと。

だから、オフの時は水を飲むのが趣味。安つくというか。それで幸せ買えるなんて。

それは渴きを経験しているから。

いのちの水の泉に導かれるとは、本当の満足を経験できる世界が天国。その天国が待っている。

⑦また、神は彼らの目から、涙をことごとくぬぐい取ってくださる。

ことごとく。このギリシア語をより厳密に翻訳すると“一つ一つ”です。

私たちは何か理由があるから涙を流しますよ。流した涙の一つ一つの理由がぬぐい取られる。

ぬぐい取るは“完全に慰める”。

多くの苦しみや悲しみは、時間が解決してくれますね。

時間と共に、それらがどんどん薄らいでいくというのはあると思うけど、どんなに時間が経っても、完全には消えない悲しみが人生にはあるでしょう。

時間が経っても、それを思い出す度に・その場所に立ち戻る度に・その匂いを嗅ぐ度にフラッシュバック。その経験にバンと戻ってしまっ…。なんとも言えない悲しみがある。

人間には一人一人、悲しみがあるんです。

そして、自分が抱えている深い所にある悲しみを、本当に理解できる人は地上には1人もいません。なぜそう言い切れるかというと、感受性はそれぞれ違うので、私の感じ方で悲しみを感ぜられるのは、私と完全に同じ感受性の人でないと無理なんです。そんな人間、私以外にどこにもいません。だから、人間というのは基本的に孤独なんです。

私しか知らない悲しみが絶対ある。なので、悲しんでいる人を見て「分かるよ」って、そんなね…。「ある程度、分かるよ」ですよ。その人が感じているように感じる事ができる、そんなはずがない。そんな人は元々いないんです。

時々、自分が怒っているように怒ってくれない・自分が悲しんでいるように悲しんでくれない・自分がイライラするようにイライラしてくれない・一生懸命打ち明けているのに、自分と同じ気持ちになってくれない、と言って怒る人がいます。

その人は人生観が間違っています。そんな人間、地上のどこにもいません。

親であろうが夫婦であろうが兄弟であろうが、私と同じ感性を持っている人間なんか、地上にいないんですね。分かり合えなくて当然です。

この人間観に立つと、時々すごく分かってくれる人が登場した時、とても感謝できるんですよ。

でも、分かり合えて当たり前という人間観に立っていると、相当分かってくれる人が出て来ても、まだ物足りないと思いますよ。

しかし、私が感じているように感じ取る事ができる方、私が感じている以上に悲しみを感ぜる事ができる方が1人だけおられる。それがイエス・キリスト。この方は涙をことごとくぬぐい取ってください。天国に行ったら、なぜあの不可解な事が起こったのかという人生の舞台裏を、ストーンと腑に落ちるようにキリストご自身が説明して下さいます。

その時初めて、「そういう深い理由があるとも知らずに、悪態ついてすみませんでした」と、皆言うんじゃないでしょうか。それをキリストは提供してくださっているんですね。

つまり、地上で悲しい事があった人ほど天国は素晴らしい所です。

神だけがあなたの心を満たす事ができるんですね。

それを準備して、私たちに救いを用意して、受け取るように招いている方がイエス・キリストです。

黙示録を通して、今の自分に語られている事として、キリストの救いを是非受け取ってください。

心からお勧めして終えたいと思います。

\* 動画は YouTube で「[HCA 東住吉キリスト集会](#)」

\* ラジオ番組「[聖書と福音](#)」(約14分)も是非どうぞ。YouTube もあります。

\* YouTube「[ごうちゃんねる](#)」(約10分)もぜひ見てください。

動画筆記 : Rumi